

函 番 號	11 / 號
種 別	圖
月 購 番 種	號
日 入 號 別	29/25 號
月	日

919.5
338
Vol. 12



常山紀談卷之十二目次

- 一 東照宮細川家の難を救ひ多し事
- 一 七人の大将石田を討んとせし事
- 一 東照宮上杉御征伐の時近江國水口を立せし事
- 一 東照宮花房助兵衛小起請文を書くと仰らる事
- 一 下野國小山より上杉入菴義論の事
- 一 渡邊惣左衛門野中市左衛門忍て大坂に使者を遣はし事
- 一 上杉景勝會津表手配の事
- 一 東照宮小山の途中少竹を伐せし事
- 一 伊達政宗膽氣相馬の城下を宿せし事
- 一 竹村半兵衛田中長胤を押止し事

岐阜城攻の事

森寺四郎兵衛飯沼小勘平を討つ事

南部越後母衣串をぬぐ事

兼松又四郎一柳の陣見切事 附 兼松武功言上の事

山田多門兵衛幼年功名の事

不詳國山

東照宮

東照宮

一 入の大御

一 東照宮

常山紀談卷之十二目次

常山紀談卷之十二

備前國 湯浅新兵衛元復輯録

○関白秀次生害の後細川忠興の家小罪蒙るべし事起まり其

子細ハ秀次當時の大名財用乏しくしたるハ潜小金銀を貸し

事あり是ハ人此心をとらんがぬ且ハ財を利せんが為あり

忠興と黄金二百枚をかりし事バ彼家金銀出納の事を司

せられたる人急ぎ彼金返し給ふべし券契を破り捨給ふべし

らんまは太閤の奉行は券契を出給へしとぞやとる忠興い

まを叶ふべし事此太閤は泄聞えらば罪科は處せし事

んを辨むひたりいすべしと案ト然しハ長臣相集りて議

し事松井佐渡守申くるハ某年頃徳川殿の御内なる

本多佐渡守正信と親く相語らひ彼は付き徳川殿を頼
ふとせん徳川殿ハさる頼母しと人あくもさるしとせバい
是程の事少く人の家亡んとさるを見捨りつるハい
中比忠貞我日比内府と親しくもたり斯る事頼む便なり
所まじも汝正信と親しくかんハ試し討てんよとつ松井
本多よ志あぐの事有つとつ徳川殿すし召其後松井を召
まを人のけく尋問せり正信して唐櫃二つ開けり
黄金百枚つを入らり其黄金の箱は題せり年月を
見よと仰有正信を考ふ北一年の未三河は御座有
し時よとつ徳川殿松井よ向をせり凡金銀ハ出納の目
ある事よと若人知まじ用んとする時は吾心よ任せ難し

此は此黄金を貯る事斯る事を待下年久し今其家の為
は吾年比の志達しとることを嬉しとて自らを松井よ
賜ふ松井大に悦びかゝる有がた御事とせり既小亡人と
すも家の斯再び継べくは事偏よ君の御恩あり細川が家の
はせん限ハいふで此情を忘るべき速よ本國よ下しと黄
金めし上せ償ひ奉るべきとつ
東照宮聞し召
りやく此事世は泄聞えりハ兩家の禍よとあれ夫故よ
斯人知まじ用べき料の物取知しとせゆめり償人事然
るべしと仰らりつ松井殊更に悦び急ぎ帰て此由を
中比とんとて御前を立くゆかり遥経て忠貞其事とな
く御館よとつ御對面の序よ正信を呼び
東照宮

聞えりうば齒をかきとて止まらり 東照宮岡召太閤
在世の時ハ寵を頼りて權威は誇り無礼もあぬべし今
は當りて諸將の申さるる如き理なきはしづも罪の
疑はハ輕くはしとややめぬとて強てなごめあひされも
尚止むべしとてあはれは今世治りては弓箭を起さん
とや力あは事どもたより我石田と心を合せ諸將と軍
を仰らましとより止事を得ざりて怒を押して
止まぬ其後今世の亂とならば又穏らあらん事と
一己の所存は有べし暫く佐和山は退て公の万事に相たる
さるる事あきて然るべしと子息隼人正の事ハ我よく
家を全うせん事を計るべしと三成は仰らましハ示し使

謝して佐和山は歸るべきや否景勝は相計りらば景勝
我會津は歸りて上らば内府催使有ん其時侮りて
を頭して罵るをどあらば必軍をかきまべし行がり
のやとて打破らまんや固く支て戦ん其間は大坂は討
ておろ素より心を合する諸將を集め旗を揚らまし是
よる謀るべしとも覺えはと計らましは三成佐和
山は趣くよぞ定めたる三成が士大将島左近昌仲三成は勸
めらるる秀家秀詮も兩端を持つるよや覺束ならん
佐和山の軍兵を計るよ一戦を決らるよ不足はあど一千餘
を止めく佐和山をちりせ蒲生備中舞兵庫高野越中と
某各二千の兵を卒て風上より火をかけ所々を焰とあして

攻^クらるるやどあるべ内府拒^クらるる引退^キまんまを追^オ詰^ク
軍^イせは争^イう打^ウ洩^モささき万^ワ小^コ一^ツも志^シを遂^トおさるるあ^アら^ラバ^バ潔^キく
御^オ腹^ハ召^メま^シゆ^ク空^ク一^ツく佐^サ和^ワ山^シは退^ヒきま^スあ^ラバ^バ後^コ悔^ウさ^スる^ルと^トも^モ益^キ
あ^アら^ラバ^バ居^キた^タら^ラあ^アら^ラバ^バ図^ズを^ヲ外^ハさん^ンの^ノ口^ク惜^シふ^ルとい^ハひ^け
ま^マど^トも^モ三^サ成^セハ^ハ景^ケ勝^トと^ト相^ア策^ハア^ラる^ル故^コ昌^チ仲^ナが^ガ謀^ボ畧^リを^ヲ納^メら^レて
止^マぬ^ル三^サ成^セ既^シは^ハ佐^サ和^ワ山^シは^ハ趣^クく^ス及^ツんで^シ七^シ人^ニの^ノ大^オ将^シ控^ケ憤^フ海^カら
一^ツら^ツば^バ道^{ミチ}は^ハ俟^マて^テ討^チえ^ベ一^ツと^ト云^ハぬ^ルと^ト東^{トウ}照^{シヨウ}宮^{ミヤ}召^メり^シ召^メ
今^{イマ}ハ^ハ打^ウ捨^セ置^メを^ヲや^メ何^ニも^モさ^シき^キと^ト本^ホ多^タ正^{テイ}信^{シン}を^ヲ召^メて^テ仰^{オホ}せ^られ^り正^{テイ}信^{シン}
つ^ツら^ツく^ク思^シ慮^{リヨ}し^て今^{イマ}日^ニ本^ニを^ヲ取^リて^テ德^{トク}川^{カハ}家^ケは^ハ献^{ケン}じ^る者^{モノ}ハ^ハ石^シ
田^タま^マて^テこ^コろ^ロ之^ノ其^ノ故^ノハ^ハ三^サ成^セ好^{コウ}曲^{キョク}あ^ルる^ルゆ^ゆゑ^ゑ人^ニ々^々思^シふ^ルべ^シと^トも
又^{マタ}三^サ成^セは^ハ興^{キョウ}じ^る者^{モノ}も^モ多^タく^ク容^{ユウ}易^イく^ク打^ウ亡^{ボウ}し^難し^故小^{コト}言^{コト}を^ヲ礼^{レイ}儀^ギ

よ^ヨ託^{トク}し^て手^テを^ヲ德^{トク}川^{カハ}家^ケは^ハか^カり^く亡^{ボウ}さ^さる^ルや^ヤと^ト存^ゾる^ル人^ニ々^々い^ハへ^た
三^サ成^セ今^{イマ}亡^{ボウ}て^テ後^{コト}悉^{シツク}く^ク平^{ヘイ}均^{キン}は^ハ帰^キせん^や諸^{シヨ}将^{シヤウ}外^{ガイ}は^ハ殿^{テン}を^ヲ敬^{ケイ}は^はと
い^ハへ^ども^モ内^{ウチ}は^ハ隙^{ヒマ}を^ヲ伺^{ウカ}ふ^ル人^ニも^モい^ハせん^故太^{コウ}岡^{カウ}の^ノ恩^{オン}を^ヲ得^{トク}る^ル豪^{カウ}雄^{ユウ}
秀^{ヒデ}頼^{ヨリ}は^ハ背^{ソム}く^は忍^{ニシ}び^らる^ル三^サ成^セを^ヲ憎^{ニク}む^ルの^ノ心^{ココロ}を^ヲ移^{ウツ}し^て殿^{テン}小^{コト}懐^{ナツ}き
中^{ナカ}に^ハ三^サ成^セは^ハ殿^{テン}を^ヲ敬^{ケイ}し^て重^{オモ}ん^{ぜん}事^{コト}愈^イ厚^{コウ}なる^ベし
三^サ成^セ久^{キウ}し^く人^ニの^ノ下^{シモ}は^ハか^カら^ずい^はべ^き者^{モノ}は^ハい^はら^ずい^はば^頓て^テ弓^{ユミ}箭^ヤを^ヲ
取^シて^テ掌^{タテマ}の中^{ナカ}は^ハ有^{アリ}三^サ成^セ敵^{テキ}と^シす^る小^{コト}足^{タラ}ん^や其^ノ時^{トキ}三^サ成^セは^ハ打^ウ
勝^チた^らば^バ殿^{テン}自^ジ然^{ゼン}は^ハ勢^{イセ}ひ^を得^{トク}さ^せら^れひ^く誰^{タレ}も^モ靡^{ナヒ}さ^ず徒^{タタ}
と^トい^はれ^ばき^き日^{ニチ}本^{ニッポン}三^サ分^{ブン}の^ノ二^ニと^ト殿^{テン}小^{コト}帰^キ服^{フク}を^ヲく^ん只^{タダ}三^サ成^セは^ハ脚^{ケツ}心^{シン}
を^ヲ付^ケら^まし^て彼^{カレ}を^ヲ立^{タテ}置^{オカ}き^てい^はら^ます^べしと^トい^はら^ます^べしと^トい^はら^ます^べしと^トい^はら^ます^べしと^ト
申^シら^るる^を関^{ケン}召^メ入^レら^ます^て三^サ成^セが^ガ旅^{リョ}程^{テイ}心^{シン}許^コなり^とと^ト結^{ユフ}城^キ秀^{シウ}

康卿をもちて送らせぬひりの

○東照宮景勝を征伐し関東へ向せし時江州水口御
浴りあり其明の朝長東大藏大輔御膳をなすべきし中
て御約束ありし小夜四ツ頃俄に水口を打出させし御輿
をかく者出合さるるは渡邊忠右衛門守綱草鞋脚半
かげよと御輿のうしろをかたきとを誰ぞと仰られし
ハ渡邊忠右衛門よと申し中を関召何とてかく不意に打替
を知しとぞと御輿有るまじく若年の時より御傍に仕へな
すは月の是れを事の仕まじくは情なき御詞なりとぞ
申々忠右衛門宵よりかたきんとおしとらぬと御輿の
ふら枕しとて臥居しとらるとや其夜土山に忌せぬひ

て翌日水口へハ昨夜時をやりきりて早く立ちぬと仰
せしとらぬ

○東照宮景勝征伐の御時小山より石田兵を西國に起せし
告をすし召前ハ景勝が勇將ありし西國ハ皆敵なり
と人々驚きしとありし小花房助兵衛職之を召て汝ハ近年
佐竹が許に有て義宣が心ハよと知しとらぬ乱は二心有
る軍を出しとて歸るを塞ぐべた又義宣謀反の志
ありしとて起請文をまじく我に見せよと仰し
し小花房兼て義宣ハまじく信のあり人より人を
ふれ子細いし只人心の反覆ハ父子此間も討てがた
よと起請文ハ御ゆるさまと蒙るべしと申し

東照宮

助兵衛の浮田が家の長臣と闘ふ。器量の小的男。大息つうせぬ。花房かく。後傳へ。起請文を書。な。佐竹二。軍兵の疑を散。為の仰なり。小察せ。起請文を書。口惜。義宣軍を。我何の罪。海く。

○景勝を征伐せしむ。時七月廿四日。東照宮下野を。小山の御署陣あり。其日伏見より石田三成佐和山を。大坂より諸大名と相謀。亂を起す。上日告。先陣の諸大名諸將を召。東條法印津田小平太本多中務大輔井伊兵部少輔を以て。今度三成兵を。間定て。

妻子しを悉く押籠べし。心中の難義を。且豊臣家の。大坂より。妻子。付又ハ三成。心。らんも。迷恨。仰出。皆疑。か。進。福嶋正則。加藤嘉明。黒田長政。向。各思慮。も及ぶ。人。三成。置。只今御味方。て其質を。妻子の恨。誹もの。秀頼公へ。出。人。三成。我。及ぶ。妻子の恨。世。有。人。我。先御手を討死を。遂べし。と。皆。御味。

方仕るべしと決定しぬ其座は是むらの事辨へざる人は
なつたよらうも素よりなれども時よあつりく義春の
片言抜群は多えりるとなり

又一説は一座いさごとくをやらざる處は福島正則何と
て石田は後ひく弓箭をこらんや秀頼公は疎遠ご
ちりしまさばハ神明の誓ひく正則御味方たらん事
勿論なりといはるる一決しきりといへり

入菴ハ上杉弥五郎として越後上条の城主後民部少輔といひ
く景勝の姉婿なり

義春ハ能登の畠山義則の弟あるを五歳の時より謙
信の久置まて上杉定実北畠信子とせりたり

謙信の先陣は大将よく武名世は高し景勝新發田因幡
守治長が謀反を討く新發田の城下よちりめらるる治長
切く出京獲の先陣を放生橋まで追崩し景勝の旗本へ押
かゝる此時義春景勝の旗本の先は有しが日比丸の旗本とせり
三十間計先へ切し手廻りの士とせりなりぬせ鎗袋を
作て待りけり治長引退くを追討よとせり勇將之
大坂冬陣は二條の御城御書院は諸大名出仕の時
東照宮入菴を召上杉家の武者おりの事ども御尋あり
入菴詳は答へざるを後一名上杉家ハ軍法素より及び
事ども深く感入ぬと仰有諸大名列坐の事の中よ
入菴小男ある言語分明小其次第誠は懸河のこととす

まは諸將何事も武功智謀の人たるれど詞をおりのたぐ
はく感入る色なりたるもとや

○同下時國清公朝臣の事小山よちと一り大坂の北は方カタは誰タレの
使ツカシまへきとて慶長五年七月廿四日長臣ユヤウシを召シて其姓名ナノイをまて
おせと仰らる各奉カクハスりぬとて其明アカる朝書カキツケ付く如ニは渡邊ワタナベ徳
左衛門とぞまゝ一り公も左の袖より出させぬとて同下く
渡邊を記させりいりある患難ウヅナシをも堪タて事餘使コトヨリとてま
人なりとくと思へる故なまをさすべしとて渡邊を召て此音を
仰らまし又此ハ大事の御使ミツシとて一り衆議シユギ一決し
し上ハかくの謠ふ及ハざるもの仰を蒙りさてハ今一人添
らまし人ハ病とせりもいハとヤクまハ野中市左邊を相

副らる書二通を渡させり仰を美さるる程ホドあく東西の
戦タカヒあへんきよ大坂は赴オモムく事らるるぬをいの見え々まは
公コウやとく関所セキジヨを通り得エず若殺モシコロさすことコトハ吾馬ウマのあや
討死ウチシしとて思ふべしなむりむちせく大坂の屋敷ヤシキに到イら
バ今度の一番首取イチバンクビしるふもあさるべしとの詞コトバふより二人下
人も召具メシタせだ七月廿五日小山をゆく其比三河ミカハの吉田ヨシタハ公の
領地リウヂなりしは巴ウラが宿所ヤクジョへも立タよるべし登カサをかきあげて忍シびて
おるは尾州ビ熱田アツタよむとて船着フネツキは大竹オホタケの虎落ヒガカリをゆひくも
アしり神職カミツカの大原オホハラ左衛門サエモン大夫ダイフハ渡邊ワタナベが知シりしとてみ有アて
潜カクレよ立タりしとて爰コゝも大夫ダイフが下人ゲニン竹タケをかきあげしとて把ヲを
くくり付ツく七八町計サキタナ先サキをまて此コをまてしとて案内者アナイシヤとて
上ウラ三サン九ク

伊勢方の堀又行く夫より勢も山も各敵の中を忍び通す六
飯を乞へばきやうもななくあつた朱をかゝり関の地藏は祈り
行あふ人ごゆるよあやしくこのもき関所よく殺さるる人よく
心得らまふよと口々よの関内有様傳へきくよなうく通るべ
きやうハ思ひもよと伊賀越るやかゝるべた浅間越るや
祈るたと二人おかゝるひく先伊勢の大神宮に祝上忍
近が許はけく宿を借んと立よりなまは今何方より参り請
人のあつたきとてをあいだ左近立出と一宿の事ハオと承ぬ
しく物よ捧りてたきせと罵りたり二人かく見奴かな
まはしく池田家の恩を請る身ある中と怒りてせん
たなく空しく立出る時左近追つらく何國の人ぞと向池田

三左衛門尉が士ありと答ふ左近あつたバそこの川堤に下
乞食の上とてさるむらろをかぎりて待たせよと小声よんバ二人
さる程あつたんとていつる詞のめくあつた夜小入て左近来
昼の乞食ハ何國あるといふを言てさるあつたといふさしてひそ
う小相約して左近が家の裏の戸口より内子入奥の一間小志
し痕をささめあつた左近今此時家ある下人も打とくべ
きふあつたバ昼のきれりけあつた事をやとさるよとていそだ
飯をささめあつた夫婦給仕をささめりたつた道のを事と
向は浅間越ハ人の往来あつたなれば此頃ハ女乞食をも殺し
中く通るがさるべし只一命をわけあつて伊賀越る通る
さる人といふとさるバとて荷はるをあひ殺さるはさる

身をやつし御枝箱を笠はけ刀をも左近が許はおきいと
見ぐさしき小脇ざしを未出しし指さうらうかかくて曉宮川
を打渡り関所近くなりて見まば通るべきやうぞかたやそ
一封の書をば深田の中よほくかく埋め其口は必やく山
ありあくる朝一通の書をこよりありて青草をとりて二三の
印を笠の緒とく一の関所は必の固めたる士どもか
大亂の伊勢は詣る者やあるそま打殺せしひめたり二人
ハささげばゆくより伊勢は詣て此さらたよ及び一夜の宿を
かまべりばどの法令よりいづらよものへきやうもたなく
進退きまよりて大坂の妻子も心えなく天照大神をたの
まますせりて帰さんぞとたをりたりさるばると荷ざりし御

杖箱脇ざしの鞘を打くぞ髪をとらせ帯裕りしちりまも
改見てあやも事もなかつよとて通りくまば夫より次の関所
をも事ゆゑなく打さく大和の奈良はかく寺に入酒を未て
飲りりりり住持の僧さうなまあせよと別よめた酒を
やし又茶をもゆりて悦んで二人腰につけしる錢をあ
りし小僧多しとて請取む其時住持の僧れ曰能もたむら
りて爰までありしとききゆく爰まで忍び来る人もゆいど
皆関所を殺さるよよくたむりあへ故ある人とおぼえさ
アと語まば二人心中より打撃さしきまも伊勢カネありる
物語して天照大神は助らむとて無事よ下向さるよとて
此より後もかくあんと氣つらりしもゆいばと答ふ僧はく

はくといひて是を信ぜざりてさなはるんは別ワカの事もいまだ関所
を事故コトなく通られりてんは朋友トモとては奈良比叡ナラヒハ見ミつ
しつゝの裁カとがしつゝとて二人ニヒトを志シすべしと打笑ウチワひひて
行イ奈良ナラと大坂との間マは関所セキゴあり何者ナニモノと咎とがめりて又前サキ乃
どくく伊勢イセカよ急いそぐも淨話キコよふといふバささるバとて改カじりあや
し事コトもあつたは通スさむやといふや番ばんの坐上カミキよあつて老人ロウジン
抱かかまいをせと是非シヒを論ロむも及およびば斬キて捨スよと下シ知しりて
末座ハツガより真マコトの糸イト文ウチ此者ココノモノと刃ヤを以もつて斬キて棄スバ神カミの祟タガも恐おそ
ありと再三サンサンいひり二人ニヒト危あやまをのぞきて大坂オオサカへ行イき
東國トウコク方の諸將シヨウシヤウ此屋敷ココノヤシキは八虎落ハチコゆひまへ大坂オオサカの兵士ヘイシ門カドを
を警固ケイゴして内外ウチソトの出入シュツニュウも絶たきも兼かねて知しる材木サイモクの商家ケは

行イく大根ダイコンを買カひひりや声コエを聞き知しると打ウ返ヘりて大根ダイコンを賣ウる
去い似にたり久保田クボタ市大夫シヤウ窓マドより見みるくいふ渡辺ワタナは似にたり人も
あるれといひく大根ダイコンと一声ヒトコエよば渡辺ワタナ久保田クボタ窓マドの下モトは
笠カサをやり大根ダイコンをさしおほくち宿しゆくをとへば志しかりたりと答こたへ
く材木屋サイモクヤがめとめど帰かへりて野中ノナカは勘かんと告つて悦よろこびあへる若わか
原ハラ勘解由カケユ北キタの方カタは属つてありて久保田クボタかくとしバ門カドをちり
大坂オオサカの士シよとてりて薪タキを荷にふ人夫ニニゴ二十五人ニニゴをちり其中ナカ
一人ヒトを残のこりて渡辺ワタナを其そのがらとて薪タキを荷にひく門カドを通とる時トキ
警固ケイゴの士シ此男コノヲコハ今朝コンテウちり者モノはあつてと押おめりて久くしく
煩わづひく打卧居ウチフシキとて快こく今日コンニチちり人夫ニニゴなりといふとも
更さらは入いり勤かを由ゆ立出たちりてはくといひ断ことわりて通とりて得とりて北キタの

方の前よりあり公の仰をこまよくと述て笠の緒をこめて奉る
北の方ハ簾を隔て對面より其後渡邊は祿ありあつて
賞せしむ事大方あり誠は危き所を道を得しむ事ど
とたり

○東照宮會津を伐せし時景勝ハ謙信の影堂にあり
諸將士卒は二心有まじりと起請文をまかせ妻子をば會
津よりあせ焼草を積置て敵寄来らば逆せせんとい
所々の地形をたのしむ白川は安田上総を先陣として
津下々齊を二陣として系務ハ只一騎皆冬ノ嶺に登り
夫を案内者より山中を通り白川の境に明神は出兵
をこころ不意討くかゝるべし道を討らまはし上杉方小

も此をあらはせしむるに寄るハ後もあらは
陣大田原は陣して白川より一日の行程なり系勝大に悦
て其勢八千を率る長沼は陣して寄手白川は攻入る時山中
の間路より思ひもよぬ後まはり東照宮の御旗本
切く入萬死一生の軍せん謀らまはし石田兵を起すよ
し聞えし東照宮宇都の小山より引かさせぬなり
○會津征伐の御時東照宮下野小山の途中より左右の近
習れ人々より向せぬ我軍を忘るるありあまある小竹林
は串のたのむべき細竹を切し仰らまはしは則切てなるを
たつて帝をとりおさせぬ鞍の前輪はおあてて切裂く
くくり付二つ二つ打つりあり景勝などを打破らんは是小

て事足ぬとの多へり 実小庵をこすまきしめふはあゝと上杉
家ハ父より已来武勇の家ゆゑ景勝騎將たのまバ人とのあや
ふむくくろあるを景徳を侮らせめあめ機を示させむひ
よりや然る処は西國中國一同は御敵なりといひあゝ小山
より引返させむ時又彼竹林をふるせせめあは上方を攻破
はハ此庵も無用の物なりとて棄めしり前後は天敵あま
バ人々愈疑ひおそくあは杉の恐ろしき足ぶるの機を
示しよふなるべし

○同日時伊達左京大夫政宗ハ急ぎ本國に歸てかゝめより
攻入るをたより仰を奉り大坂を打立夜を日まつたて池下
へ白川より白石を以て皆かゝたの中なるれば道ふさぐわぬ常

陸國をとりと岩城相馬より一かつく國に歸らんとする
不相馬まゝ累代の仇あり然るは政宗僅は五十騎むり
引具して常州を經岩城と相馬の境に到り先相馬が討り
使をこめて此度徳川殿上杉を征伐しめあはよわ政宗かゝ
より向ふべきよの仰を兼りぬ路既は塞ヤムひりちど
よやしく此地は馳着ぬあがりふさをめて道をくうし
ゆゑ疲まゝ願なくハ城下は旅飯をせよまはつたや馬の足
休めて明日國に歸て入んと存むといせむり相馬長門守
義胤をこめてあつたを運の尽くる事ぞりさゝぬ
伊達ハ相馬う年比のかゝるありよりや味方討ん一方
の大將兼るゝといふのをいづく今宵一夜打つて案

内知ぬ奴原を一人も残らざり討取て年比の仇は報へ又今度
の賞ふと預らむやとてやがて民家を志つらむとて迎へ合
人々集て夜討の評定し事たりたり爰は水谷三郎兵衛と
し者たるは末座よりひるるが進も如末座の是見忍入て之
ども既は僉議の座に連りて人バ所存を殘さばたはあはれ
抑窮鳥懐に入時ハ擲者もあはれを殺さばとてとて中へ政
宗やとの大将年来此恨をさして君を頼きて来りしとき
むらむらやみくくと討まん事勇者の本意はゆへに也
弓箭の瑕瑾ありむや又彼が國境駒が峯に至らんは行程
僅は三里く日未だ未の時よさざらば政宗が國に入んこふ
とて日夕なるとさるは至るなりそまじし僅の勢にて止

事深き慮なるとさるんや只此度ハよたは敬言固く國小
返し重なる戦ひは臨人日勝敗を天運はとうせらるべきや
とてさるは一座の人々此議は固く兵糧秣も塩魚も
まぶたはさるを焼て夜廻りし義亂が士も政宗あ
まひ小志るまひかへりては体こそ心ありさるは試ん
夜ふけて後馬二匹とりてなち人々走りたり以の外
はさるのくしる政宗小童一人は燭をせ白死小袖を其お
かけ左の手は刀を提り立出相馬殿の御人やはとつは是
はとて行向へバ物音さるは政宗が下人原狼籍はるへりは
よく志がめくまひりりへとて又内へ入るは夜明もど
とてさるはやく己の時をくりは成く義亂のゆへに使し

一禮しきくちぢめく馬を打て行ひそふ人を付く窺ひ
るふかの國北境駒ヶ峯北何ちくふ伊達家の軍兵雲霞の
めくみちくく出むうぬかくく関が原の事終て相馬
はごま上杉よ心合せごまバ亡ぶごま極る政宗訴へ
一八相馬八年比政宗がめくたあり石田上杉よ興一ごま一
定なごま八政宗彼が為よ討ごま然るごま君の仰奉て馳
下るごまをめて深き恨を可有ごま新恩を施て彼逆謀
よ非るの証よゆすや又累代の弓箭け家永く断へ事不便
の至かりし度々たごま申されごま後よ八本領を相馬よ
賜るごまごま関るごま

○関が原の時三河岡崎の田中兵部大輔吉政の子民部少輔長

胤ハ父大坂方よ同心たりといふを聞く宇都の小山を忍び
出居城岡崎よ歸るを國清公聞し召竹村半兵衛を召
まご五右衛門よゆる頃まで民部を牛窪よおさごまめ置けと
仰らる竹村は安き事よハゆごまいごま信計ひてん
ちんとして道よ出迎ひ鉄炮の者を百姓の家よかく置具よ
支度を言ふごま其身ハ山のせむごまおごま待よ長胤来
よ竹村池田三左衛門尉ひそごま申せごま中事のゆごま是よゆん
いへハ長胤馬廻りの人を遠ざけらごまうバ竹村静よ歩よ
別の子細もゆらごまおごま留せごま三左衛門下知ごま
云もあごま左の手よごま長胤をひごまごま一尺計の脇ごま
を抽く長胤よごま當ごまごま從者ごまごまハ口をごまやと怒れた

せんうなう竹村詞をうけ近くよきまは吾ハ殺さる
とも民部殿をバ刺貫き申さん唯お一留りのまゝ、別乃
事ハハハと呼りりる如は百姓の家は伏番する鉄炮の者
どもかけ集り鉄炮を長流にさし當て竹村を討んとたふ
忽民部殿を打落し申さんと声々々も呼りりりり長流力なく
竹村は従て百姓の家に入バお止し四方を堅く守り
かゝく東照宮へ召父既は味方は成る上ハおし
と仰らまうれば長流則ちきり後ハ公は遭くまあり
き有さばゆありせまひるよといわれしや

○岐阜の城を攻る軍評定の時國清公大手は向らんと仰らまけ
る小福島左馬頭大夫正則は吾こそ今度の先陣なれとてあ

らまゝまゝ井伊本多公は向ひて内府の御縁者たり議
らまゝと有りまは正則ハ尾越より西美濃に入て大手は向
ひ公ハ河田の渡より寄させあふ定りたりやく有て正則
搦手へ吾こそ向ひんをん尾越ハ城は遠く河田ハ遠浅なれば
馬よく涉り易るべし大手は向ふも城を早く攻破らん
為なるまは只搦手よりよせんものをとやさささるを井伊本
多正則の領地たるまは大手より船筏を以て渡さまらん
事安らるるまは三左衛門尉ハかゝめあり向をましり既定
つる上ハ今更かへんも然るべしとやまゝしり正則は
ハ吾敵地は入て相圖の煙をあげて後池田殿川を渡され
よといひく大手は向をまゝなり頃ハ慶長五年八月廿一日に

まづ膏ぐつたよ公ハ清洲をうち出河田のゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふのゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふのゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふの
ゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふのゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふのゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふの
ゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふのゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふのゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふの
ゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふのゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふのゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふの
ゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふのゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふのゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふの
ゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふのゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふのゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふの
ゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふのゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふのゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふの
ゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふのゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふのゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふの
ゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふのゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふのゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふの
ゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふのゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふのゆるい陣イ藤五郎右衛門と云ふの

須賀平四郎物見スガヘイシロモノミより一騎乗歸り敵の多少ハ芦原アシハラ

陣センを見えころびりども二三千ハよもるゆはゞ軍ハ
味方の勝しゆ子細コササハいふと向ふハ須賀敵の後陣コササ續
り然シカ後ノチ兵を伏せ地十町チウジウ討ウチつゝやどよはゆるべしとも存せ
ば遙トホよかけ来たる人馬ヒバの息切イキキまてよたよりとなふし
と申イハもすてぬ伊木清兵衛忠次味方の旗ハタハ前マヘよかこ
むき陣の色イロく後ノチもさり敵ハ後ノチ仰ウツロて人の面白オモテシヨくん必カナラ
定味方サダメカク此勝カチなりといひさかり
公味方コウミカクの陣センを整トシへよみどりよまきもむきと下知ゲダチのゆるい陣セン
などもめめらよぶた吾ワレはとと進スめゆる幸三町サウチウむのり
公今コノイマハ姑ハハこそよきまこと腰コシ挿サシする磨サイを取トルて一ヒトりぬせ
まへハ一同イツドウよとつと打ウツつかり忽敵タチを撃破ウチヤブらむと八田ヤタ

太郎兵衛久次此の敵を追うけしる所は朱色の物具着て紫
のちろりかけしる武者一人息つた居しるをいづく馳寄しり
かの武者ハから立ちあがるがひしと折しく八田馬より飛下り
を合せ遂に討取しり是前田半左衛門なり

半左衛門ハ徳善院の従子よく岐阜中納言秀信の近習
の臣たより打見しる處ハすぐまき温柔ししと常小よく
論小たへしる人なりしる人々男子よけむと笑ひし
此日の軍小敗軍の中は武市忠左衛門と二人あまを
あり引立しる味方をまげまししきげやつげと呼をり
く目を驚まてたしつたして武市も討死して日比前田を
侮りしる者どもも前田よ及ぶべたやしもなるとしり

八田ハ父を弑三右衛門正久とりふ士大将あり太郎兵衛今
年十八才父の陣代しり前田を討たしりし従者柏原空
右衛門尾関跡五左衛門かけ来しり八田を馬よ奪ひて歸れ
八田後人よ語アしりしり年若し血氣よとたよ
しり敵一人討取てその疲るべきよしりしりし其
時きすけ来る敵あしり小児よも生捕とせしるべし死生
の間小立し敵を討たしりしり勇氣のおしりしりし故
かのべしとぞ語アしる慶長六年禄二千石を増与へられ
同八年公参議に任じ参内の時久次太刀の役しり従五位
下よ叙し丹後守と称して後豊後守と改む前田利長久
次が武名を聞一万石まき招ましりしりしりしりしり

福嶋正則ハ大手の惣大将より素より他人より超らざりしと
思ふに、公既新加納より敵を撃破せりしと、怒りも
ふへく廿三日の朝先陣して攻寄りし池田家の軍兵朝日口
より攻入るるを惣公人の土手此上より見て人此功名を嫉
道全といへる法師武者より下知して町口より火を燃せしむ
搦手の軍兵烟をむせびく進み得る公是を御覽してこハ
心得ぬ志ざりなり火のまゆるを待たまやとて、来木畑を
めぐり長良川より後北水の多よおり、まよふ池田吉左衛門
公此城よりせし時水門は居て案内はよく知つ水ぬきの有
りより入りく水門を打破り旗を差上げ池田三左衛門尉
本城の一番衆と呼りしと、正則の道を妨らざりしハ都く

池田家の幸こと後より人より、東照宮御書を賜て敵
軍川を隔て相支る所より、輒く打破り岐阜を攻落さざりし
功名賞せりし、不訥たりしとぞ書せしむる。

○岐阜中納言の士飯沼小勘平といへるハ四天王とせよ、ま
剛の者なり、新加納の軍破まりし時小き堰を、あめりく
居寄りし、池田家の士大将森寺政右衛門忠勝が第四郎兵
衛長勝飯沼を、目かげ一間あちりり、溝を馬よ声かけて
ひりりと飛せり、飯沼が左右より鉄炮を打然り、まよふ
甲曹よあちりし、其身ハ多も負む、競ひかちりし、敵ハ多勢
は、くくやとひん、飯沼が者どもちりり、まよふ、森寺馬を
兼て、飯沼名を、と、宛を、か、池田が内の森寺、四郎兵衛

と名乗る飯沼池田が内の森寺あつてババババとつりあより刃を
抽く木立ちが馬より下んとする処を右の膝口を切つてバ
森寺左の方へ飛下り馬を隔て切合るが又左の腕は疵を
受り今ハ叶ハドと思ひく白刃を握り掌をくくまじやうら
無手と組飯沼をおさへ透さば刺通せしが疲まゝて首を
取つても既よ人よ奪るべうり小従者久兵衛といふ者
走り来り近づき者を追まじひ馬は楡のせき奥國公武藏守
利隆朝
藏臣の事此時新 十四五騎あつてひくまふまふ参りかくて中
又國清公の御前より参りて飯沼を組む討つて中
飯沼が曹ハ小田原鉢刀ハ行光の作脇差ハ菊一文字あり
森寺が従者分捕りて今森寺が許は有といへり森寺う

飯沼を討取り事関ヶ原記其條のまゝも池田備中守
とてあるせるハ謬なり

○岐阜の城攻は池田家の士南部越後門隙に押詰りて小門
れくより狭くかゝるあつて支へて入得どかゝり母衣
串をぬりて入べりていふもいやくたへ入得どとも此が
ろハぬくもいふと噂する其甲は門ひらきて池入り其武者
ぶり甚見事なりとて中府の人ひひとせん

○岐阜の城は諸將おこする時一柳監物直盛の兵一騎先近
しとて川は馬をさらりと打入り直盛は付くまじやう目付兼松
又四郎正儀九尺計の十文字比銃を控鹿毛なる馬はあつて
堤の上よりひきて是をいふあつて剛の老よ老武者う若武者ら

と向ふふ直盛ナホモリは安井新九郎ヤスキとて今年コトシ九二三コトシや成
りんとそふ正儀マサノリ吾ワレたゞ功名コトナメをせむべし若武者ワカな
まバ惜オシき事コトよくつひと終ハシらぬよ安井向ヤスキの落キレを待マたけ
敵の中トモよかけ入イて討死ウチシしかり直盛馬ナホモリを蹴キとて進スむ
きつゝのうへを正儀マサノリお止ト免ハヤ早くハヤくわとてやく有アてこ
云イまは馬ウマを川カハよ打ウ入イらまはしり直盛ナホモリもおとこしと渡ワさ
まろり敵敗北トモしりまは正儀マサノリ陶魔堂タマダウのこゝろまで追オか
味方トモをわしとむ直盛ナホモリをど追付オヒツぐとやと向ムふ敵トモを陣ゼンを
整トへしり引ヒくまは一定味方崩クマえし百々木造ヒツキハ枝阜エダの
古兵コウヘイあまはあし止トんと思オモへども地の理チノリたつと退ヒくなん今
見ミらまは返カまへしりひも終ハシらぬよ竹林タケノエよよりて鉄炮テツポウを打

かく正儀マサノリ少シしもさうとぐず相向オモムふ事コトまづ有アり城兵シロウ遂ツに
引退ヒく

一説イツセツよ津田藤三郎ツタフジサロウ光房ミツフサハ秀信ヒデノブの士シなり敗軍ハイクンの中ナカより退
し朱シの物具モノグし赤アカちろけ鹿シカ北角キタカクの立物タテモノ打ウつ曹ソウを忌月キツキ
毛ケの馬ウマよあま引色ヒキイロよ成ナり味方トモを勵カしめぬと戦ウひま
を兼松カネマツ刀ヤとくおれ敵トモなりと目をかけく追オうけとふ女メ
間マ十間ジュウカン計ケよなすりたる附津田光房ツタミツフサ引返ヒし城シロより退ヒり
黄母衣キホロうけとる武者ムシウ取トり返カし正儀マサノリとこり合アひひが
相引オモヒよ引ヒくしり此コノ時トキよ又マタ前マヘよ川カハを渡ワしり附ツの事コト
かなりや詳ツなコトとて
正儀敵マサノリトモ是コノより一面目ヒトツメ有アり似ニたり此コノより返カまへしり

直盛岐阜の町口より將机を倚り鎧を横へ敵は一鎧せ
 んと正儀の方を見やうと正儀は敵はゆるりと
 果して軍はなかりとて亂れまうと後直盛正儀を饗し
 今度の軍每事仰の中にては中めも安井が討死を哀せられ
 はいりある子細を問うと正儀は死生有命とやめていら
 で人力の及ぶまじりあがり川を渉りて先陣すし討て馬の
 けげ場二三十間も越え敵のあを横へは氣をゆるし味方
 はくく時大音よ名をふべき事よん尤もななく唯一邊岸にお
 上り敵の真中へかけ入討死をまじり敵不利を得ますとて
 時よより地よより進退の志わがごとくおなりと能老兵よ
 美を置てんやうと六十よ及くおちあがり武功をも遂げとて

語らまじり依

台徳院殿御上京の時熱田よて國士御目見よゆる討兼
 松も図どくおらる土井大炊頭利勝を以て今川義元合
 戦の時功名利根山より信長のり足半を賜り事拵
 子内匠兼松と年ハのびまじりしとて御尋あり御覺
 よハ猪子を年まじりと思召しとの事なり兼松美と信長義
 元合戦の時朋輩七八人一帯よ打ちぬが馬を奪ふことあり
 いる事と刃久バ鎧を逆は掛けしり心中よ不吉とおひ
 其日勇まなく進み兼久バ功名しり老をぬきらば
 見苦しとて朋輩をとり取る首の血を甲よ塗草摺泥
 をわり朋輩の中よ交り信長の前よおまじり義元の首を信

長見て悦喜む時より合あひたりた刀根山トネより前夜ゼヤ觸有ツ
よおきくつり信長を打立ウチタテせし草鞋ワラジもく間まもあ
跌ツまくかけ付ツケ首取クビトしまバ信長シナナガ死シす太刀タチ此コノやの付ツられ
しる足半タビを賜タマふまあのようせる事こともならずし上の上利勝トシカツ指サシ
子コと年トシハいふふと問とふふもハ御見ミちがなりなり内匠ウチノシハいれ
よりより二ニツツ若ワカくくも利勝トシカツ御覺ミカを御自慢ミジマンの事ことあらまじバはり
ししとヤヤととままばばよよかりかりなんなんととりり兼松カネマツりりやくやく詐イソカハ申さ
ままびびとと答コタへへるるままふふ利勝トシカツヤヤととままりりババ大オホはは御感ミカ有アりり時トキ
服ウツ小黃金コウゴンを添ソく賜タマはりりくくるるととぞ

○河田の渡ワタををくく岐阜キフは向ムカふ前マヘ堀尾ホリノ信濃守シナノノ忠氏タケウヂ川岸カハシは
陣マタせる池田家イケダケ先陣サキマタの士大將シオウサマ伊木清兵衛イキキヨヱ忠次タケツグ使ツカシを以もつて池田

が若ワカども川カハシは打ウ入チり後渡ノチワタさまり今度イマドの先陣サキマタハ池田イケダが表ウラアらる
るるとと申マウする忠氏タケウヂ例タトヘく暫シブクく馬ウマより下オチりり下オチりり五イ下ゲ知チを
待マたたりりとといいふふれば山田多門ヤマダタモン兵衛ヱ十五歳イシハチ軍イクサハはああをを始ハジめめたり
馬ウマより下オチりりととすするるを従者ジュウシャ馬ウマより下オチりりととすするるややんん鞆ツツの前輪マヘノははええ付ツ
倚ヨりりとと待マたたせせるるとと教オシへへるるは山田ヤマダ志シちちりりととりりととすす
ややとといいふふ忠氏タケウヂの旗本ハタモトは宝螺ホウラのコエああららせせるるは我先ワレサキより馬ウマははあありり
よ山田真先ヤマダマコサキは川カハシは打ウ入チり渡ワタりりととすするるが遂ツヒは一番首イチバンノを取ツるるハ
従者ジュウシャのコエああららせせるる故ユエななりりととすするる後ノチ小吉コシキ晴ハル此コノ日ヒの勝軍カチイ此コノ告ツク
をキ聞ク首帳クビチヤウをキ見ミるるととすするる首クビ一ヒトツ山田多門ヤマダタモンとといいふふととすするるを
讀ヨみ終ららば近チカき近き近竹馬タケウマは毎マ日ヒらら童ワコのコエとと功コウ名ナをを得トクるる
よ父チが居るる人ヒトはハいいふふととりり悦ヨんんととりり涙ナミダをを流ナささすす

多^カり又梯^カ権八^ハが功名^{コウメイ}の無^ナい^ハいふ討死^{ウチシ}せん^ハ知ら^ラズ功名^{コウメイ}は
二三人^{ニニサン}の^ノ中^{ナカ}を^ヲも^トづ^ク者^{モノ}より^トい^フと^シて^トい^ハや^シま^れる^ハや^がく
飛脚^{ヒキヤク}来^リて^テ槍^ヤ八^ハ番^{バン}よ^つづ^いて^テ首^{カビ}を取^リま^さご^も手^テ負^ヒて^テ帳^{チヤウ}よ
記^キを^シ事^{コト}お^そく^まし^と告^ケり^とい^ふま^に巴土^{ヨシハツ}晴^{ハル}吾^{ワガ}見^ミる^ハ亦^モも^違ハ
り^ハな^らむ^とい^ふと^云ま^しと^いふ

常山紀談卷之十二終

